

東北の旅 <復刻版>

昭和39年9月18日 <上野→夜行列車>

上野発 23時30分 東北本線急行青葉。ほぼ100%の乗車率で、さほど苦勞せずに座席にありつくことができた。今回使用する「東北周遊券」は通用日数12日間で、東北地方の国鉄全線乗り放題、さらに東京からの往復が付いていて3,600円。急行・準急・国鉄バスにも乗ることができる。

昭和39年9月19日 <夜行列車→仙台→石巻→金華山→女川→小牛田→平泉>

仙台着 6時50分、28分遅れで到着。今にも雨が降り出しそうな空。朝食はチャーハン（70円）。

仙台駅一番はずれにある仙石線のホームへ。仙台発 7時26分。

車窓から松島を見物して、石巻着 9時（約10分遅れ）。駅から繁華街を7~8分歩いて石巻港へ。港に着いた途端に小雨が降り始めた。

石巻港発 9時10分の船で金華山へ向かう（乗船料は200円）。カメラを持って景色を楽しんでいたら体が冷え切ってしまった。牡鹿半島に沿って進む船は、鮎川を出ると外海のうねりで一層の揺れ方になってきた。牡鹿半島の先端と金華山との間は僅か800m。

金華山着 11時。船を降りて最初の仕事は昼食（親子丼130円）。

金華山神社（黄金山）に登ると鹿が放し飼いになっていて、そこかしこを歩きまわっている。神社の建物と鹿の立ち姿は絶好の被写体になる。海岸線に下りると無数のウミネコ。突堤で釣りをしている人がいるのでしばらく見物させてもらった。ハゼを大きくしたような20cm位の魚が沢山釣れていた。

金華山発 13時30分、女川行に乗船（乗船料は180円）。乗客はわずか4人だけ。九州旅行の時に乗った船の東シナ海でのシケを思い出させるような揺れ方でスリル満点。

女川着 15時05分。15時20分のバスで女川駅へ（バス代10円）。女川駅に15時22分着、バスに乗るほどの距離でもなかった。雨が本格的に降ってきた。ここまで来るともう旅人は誰もいない。あんパンと牛乳で空腹を癒して（67円）列車を待つ。

女川発 15時55分、石巻線で小牛田へ。また腹が減ってきたので小牛田駅で立ち食いそば（60円）。

小牛田発 18時16分、東北本線下り。立ち食いそばの汁がしょっぱかったのでお茶を買って飲む（15円）。

平泉着 19時56分。土砂降りの雨の中、予約してあった駅前の橋本旅館へ。

風呂に入って夕食を済ませたら、やっと夜行列車の疲れがとれてきた。

今日は雨が降って寒かった。まさか・・・と思ってセーターを持ってきたのが役に立った。

昭和39年9月20日 <平泉→毛越寺・中尊寺→巖美溪→一ノ関→花巻→仙台→夜行列車>

6時半起床、雨は降っていないが曇り空。朝食を食べて、宿賃（700円）を払って7時50分に出発。

毛越寺まで徒歩5分、拝観料は50円。本堂はあるが、寝殿造りがあった場所は池が残っているだけ。池を眺めて寝殿造りを想像するのも面白い。

バスで二停留所（10円）のところの中尊寺。杉林が美しい月見坂を登って、八幡堂、弁慶堂、薬師堂、大日堂、弥陀堂、能楽堂、開山堂、五輪塔と巡り、じっくり拝観。

11時のバスで巖美溪へ（バス代は50円）。11時35分巖美溪着。まずは腹ごしらえからということにして、肉うどん（80円）そしてデザート代わりにりんご（20円）。食後は雨の中の巖美溪探勝散策。

巖美溪発 12時35分のバスで一ノ関へ向かう。車中でこれから十和田へ向かう女性の三人連れと出会い情報交換。バス代は45円だけあってたっぷり乗った感じがする。

一ノ関駅発 13時24分準急くりこまで花巻へ。花巻着は14時20分頃。

花巻で宮沢賢治に関係する遺跡を見歩こうと思って歩き始めたが、雨が真面目に降ってきたので途中で中止。駅に戻る途中でソフトクリーム看板を見たら急に食わなくなっておやつ（40円）。

花巻発 15時48分急行むつ。仙台着は18時。まずは夕食（チャーハンとハムエッグで200円）。時間はたっぷりあるが、雨で外を歩く気がないので待合室で時間つぶし。

今夜の宿は、仙台発 20時25分各駅停車青森行。

昭和39年9月21日 <夜行列車→尻内→久慈→黒崎→平井賀→浅内→茂市→宮古>

ぐっすり眠れて爽やかに目覚めた。時計を見たら4時半、目時に停車中。

雨は上がったようなので、あとは晴を待つばかり。

5時18分尻内着（8分遅れと報じていた）。八戸線6時32分発久慈行に乗車。

種差あたりの美しい海岸線を車窓から楽しもうと思っていたが眠ってしまって見られなかった。角の浜・種市の海岸も捨てたものではなかった。

久慈着8時38分。駅前の食堂で朝食（定食120円）を食べて国鉄バス待ち。

久慈駅9時10分発黒崎灯台行のバスに乗車。普代付近のリアス式海岸は車窓から見ただけでも素晴らしい。黒崎灯台11時40分着。幕末に幕府海軍を率いて官軍と戦った榎本武揚が奮闘した場所とのこと。ここでバスを降りたのは私の他には老人が二人だけ。コココーラを飲みながら老人と雑談をして付近を散策。

13時05分のバスで平井賀へ。そして平井賀で14時23分発のバスで岩泉へ向かったが、岩泉で土砂崩れの為小本線が不通になっていると聞き、バスで居合わせた旅行客らと善後策検討。

東京から来たオジサンと一人旅の娘さんと三人でタクシーに乗って浅内まで行くことになった。岩泉の次の次の駅から小本線に乗ろうという作戦。タクシーの中で旅の情報交換をした結果、十和田湖は結構寒いらしいことがわかった。タクシー代は150円/人。

浅内発16時54分岩泉線に乗り、茂市で山田線に乗り換えて宮古に18時半頃に到着。

今夜の宿探しとして4、5軒の宿をあたって見たがいずれも不可。ユースホテルで紹介された木村旅館という半ホテルのような宿に落ち着けることになったが……。

「汚い所でもいいから、お願いします」と頼みこんだら、本当に汚い応急部屋という所へ入らせてくれた。思い通りの宿が見つからず、ちょっとばかり腹だたしい気分にもなったので、女性の三人連れと意気投合してヤケ飯の夕食。スプタランチを240円で食べて、夜行列車よりはましな応急部屋へ。

昭和39年9月22日 <宮古→陸中海岸遊覧船→宮古→釜石→仙台→夜行列車>

起床6時30分、朝食を食べて出発準備。宿で昼飯を作ってもらって、一泊一食+弁当付きで430円。

7時半に宿を出発し、宮古駅8時10分発のバスで浄土ヶ浜へ。（バスは往復で60円）

浄土ヶ浜から遊覧船に乗って海上からリアス海岸を探勝。潮吹き岩・八戸穴・たこの浜など様々な名前が付いていてとても覚えきれなかった。宮古駅に10時40分に帰着。

宮古発11時13分急行陸中。釜石線回りで釜石・花巻経由の仙台行ジーゼルカー。車窓から見る釜石の製鉄所の景色は煙突・煙・様々な形をした工場……鉄の町という印象。雨が降り始めてきた。

陸中大橋を過ぎると所々に防雪柵が目立つようになってきた。真冬の景色が想像できる。

約6時間の長旅の終点は仙台、17時05分に到着。時間もたっぷりあるし、靴が汚れてきたので駅前の靴屋で磨いてもらった。これから夜行列車待ちをするにはちょっと時間がありすぎるので、夕食を食べた後、時間調整の意味で白石まで行くことにした。

夕食は9月20日に入ったのと同じ店で定食（上）170円。食事の後は急行あぶくまで白石へ。

小学校の5年生の時に白石からバスで一時間ほど入った山奥に暮らしたことがあった。駅の待合室で夜行列車を待つ間、待合室の中を動く人の流れを見ながら「友達がここを通ったら面白いな」と思ったが、残念ながらドラマは起きなかった。

白石発20時32分急行八甲田、青森行。いよいよ明日は奥入瀬と十和田湖が見られる。

仙台駅に停車した時に明朝の朝飯用に駅弁を購入（150円）。

昭和39年9月23日 <夜行列車→青森→奥入瀬散歩→十和田湖→十和田南→大館→夜行列車>

4時に目が覚めた。時間からすると野辺地付近を走っているようだ。朝食にはかなり早い感じがするが腹が減ったので、用意してある駅弁を食べた。

青森着5時16分、寒い。十和田湖へ行くバスは6時05分発。高度を上げて行くにつれて素晴らしい景色が広がって行く。岩木山・津軽半島・下北半島……。酸ヶ湯温泉でそばを食べて温まる（60円）。

旅の出発前に友人からもらったアドバイスに従って、焼山でバスを下車して13.5Kmを歩いて奥入瀬の良い所をゆっくり楽しむことにした。

焼山発 8時 35分、溪流と滝を存分に楽しみながら歩いて、十和田湖北東岸の子ノ口に 12時 15分に到着。この選択は正しかった。色々な滝や色々な流れがあって写真も沢山撮ることができた。

子ノ口で昼食（チャーハン+なめこ汁で 150円）。この辺は国民的観光地、箱根の芦ノ湖のような所なので食べ物物の値段が高い。

子ノ口発 13時 20分の船に乗り、湖上からの観光をしながら休屋へ（船賃 160円）。船から見ると十和田湖の全景が見えるので大きさもわかってなかなか良い。

休屋 14時 40分発の国鉄バスで花輪線の十和田南駅へ。車中で東京から来た一人旅の女性と雑談。彼女は下北半島と十和田湖を回ってきたと言う。「何だか早く家へ帰りたくなっちゃったから、盛岡経由で帰るわ」と言っていた。こちらの旅はまだもう少し続く。

花輪で一泊してもいいなと思って宿を探して見たが、繁華街の真ん中の宿ばかりで気が向かなかったのので、当初予定通り夜行列車を目指して先へ進む。

大館 18時 48分着。寒いのでチャーシューメンで温まることにして、さらに野菜が欠乏してきたので野菜サラダを追加し 250円の豪華な夕食。

大館発 19時 47分急行津軽。比較的混雑しているが座席は十分に確保できた。

昭和 39年 9月 24日 <夜行列車→福島→仙台→山寺→山形→秋田→夜行列車>

福島 4時 30分着。待合室で下り列車を待つ間お茶とセンパイで体を温める。

福島発 4時 58分急行青葉仙台行。旅の初日にもこの列車に乗ったので二度目。仙台着 6時 22分。

駅前のブラジルという喫茶店でコーヒーを飲んでひと休み（70円）のあと、靴を磨いて（50円）駅に戻り仙山線のホームへ。

仙台発 7時 45分準急あさひ。仙台の町外れから徐々に山あいに入っていく変化が面白いし、何より紅葉を迎えつつある谷間が美しい。

山寺着 8時 51分。早朝の立石寺は人が少なく静かでいい（拝観料 20円）。崖っぷちに建てたような立石寺は遠くの眺めもあり、たっぷり歩いて探勝した。

旅も終りに近づいたので、山寺郵便局に入って不要な荷物を自宅宛に郵送。

山寺発 11時 01分準急仙山。徐々に下って行き山形盆地に入っていく様子がわかる。山形着 11時 36分。駅前で昼食（かつ丼にジュースを付けて豪華に 170円）。食後の腹ごなしに駅前通りを町外れまで散歩し、途中で土産を買って駅に戻った。

山形発 13時 53分急行鳥海。夜行列車で東京へ帰るために始発駅の秋田まで行こうという作戦。

真っ赤な夕日が日本海方面に沈むのを見ながら列車は 17時 58分に秋田駅に到着。駅ビルで土産のほかに、夕食用に駅弁（50円）・ビール（80円）・ジュース（50円）などを購入。駅の時刻表を眺めながら熟考の結果、急行第二男鹿に乗ることにした。寝台車があれば・・・と思ったが売り切れだった。

18時 55分発急行第二男鹿、上野行。ゴトンと動き出すと同時に缶ビールを開けて長い旅の無事終了を祝って一人で乾杯。缶ビールの次は駅弁。寝台はとれなかったが、座席はがらがらで1ボックスを一人で占有できる状態。いずれどこから乗って来るお客さんで満席にはなるのだろう。

昭和 39年 9月 25日 <夜行列車→上野>

ところが予想に反して途中から乗ってきたお客はわずかで、1ボックス占領したまま熟睡を継続。

目が覚めたら大宮駅に停まっていた。実によく寝た。列車は 30分遅れで上野駅に 7時頃に到着。9月 18日に出発してから 8日目の朝、旅は無事終了して市ヶ谷駅から家路についた。

東北周遊券（3,600円）のほかにかかった費用は 6,951円、旅の費用総合計は 10,551円だった。周遊券の特権を活かして乗りまくった列車・バスの実際の運賃・料金を合算して見たら 11,490円になった。

3,600円で 11,490円分を乗りまくったという「得した気分」もこの旅の収穫のひとつ。



気になっていた松尾芭蕉の奥の細道に出てくる場所を何箇所か歩くことができてよかった。

以上

あ と が き <後日譚>

一冊 25 円のポケットに入るような小さなノートは旅のメモ帳として最適だった。どこへ出かけるのにもズボンの尻や上着のポケットに突っ込んだものだった。旅から 47 年の時を経て机の下から出てきた小さなノートは既に茶色くなり始めていた。崩壊前に文字として残しておくことにしてパソコンに向かった。

メモを読み返してみると 47 年前の物の値段がわかって面白かった。

国鉄分割民営化の流れの中で数多くの夜行列車や各駅停車の長距離列車が消えてしまった。新幹線はまだできず、飛行機は高くて乗れない時代に、夜行列車は「寝ている間に次の世界へと運んでくれる」夢のような存在で、若者を掻き立てる「旅ごころ」の実現手段でもあった。

そんなことを思いながら「文書の電子化保存」という、47 年前には考えもつかなかった手段に手を動かしている自分が愉快に思えた。